

## 近代博物館と古代における博物館の前史

矢 島 國 雄\*

### 1.

博物館の起源についての研究は、その主な力点の置き方による二つの考え方があるように思える。

一つは、古代における博物館や博物館的なものを考える立場を強調するものである。それらが、直接に今日の博物館へと連続するものとして断ずることはないにせよ、今日の博物館のもつ性格の一部と関連するものを追求しようとするものである。アレクサンドリアのムーセイオン *mouseion* や、アテネのピナコテカ *pinacotheca* を挙げて博物館の起源とするものなどが、こうした立場に立つ考えといつてよからう。(1)

いま一つは、今日の博物館の直接の起源は18～19世紀の近代市民社会成立期にあり、大英博物館やルーブル美術館などの博物館群の成立をもって考え、それ以前の博物館的な諸形態については前史として考える立場である。(2)

国際博物館会議 ICOM の定義によれば、『博物館とは、社会とその発展に寄与することを目的として広く市民に開放された営利を目的としない恒久施設であって、研究・教育・レクリエーションに供するために、人類とその環境に関する有形の物証を収集し、保存し、調査し、資料としての利用に供し、また展示を行うものをいう』(ICOM 定款第2章第3条)とされる。博物館の機能は、収集・

保存・調査・研究・展示・教育・レクリエーションなどにわたり、広く市民に開放された恒久的な施設ということである。今日の認識では、上記の諸機能を併せ持ち、自身が機関としての諸活動を行っている組織体を博物館と呼んでいるといつてよい。

これらのなかで、博物館をもっとも特徴づけるものは何かといえは、展示であり、その公開を通じての教育活動といえる。この点からみれば、そうした観念が意識的に打ち出された近代における博物館群に、その起源を求めることが妥当といえよう。

### 2.

近代博物館群の成立後、今世紀に入ると、博物館の歴史に対する関心が生まれる。1904年、ディビッド・マーレー David Murray による『博物館：その歴史と活用』が嚆矢であろう。

マーレーは古代～中世における博物館の起源的な諸例をあげ、ルネサンス期とその後の科学の発達の中で、種々のコレクションが成立し、そのカタログが刊行されてきたことを克明にあとづけている。さらに、*museum* という用語の成立に触れ、16世紀の最終末に至って、コレクションとその収納場所の両者を意味する語として使われるようになったとしている<sup>(3)</sup> (Murray 1904 chapter I～V)。

17～18世紀のイギリスを中心とする私人の

\* 文学部専任講師



図1 ハンス・スローン (1660–1753) (Miller 1974より)

コレクション (cabinet や museum と称された) についても詳述している (Murray 1904 chapter VI～VIII)。貴族や上層市民層による時代の精神・文化を反映した動きとして注目されるものである。

こうした私人の cabinet や museum の中から、大英博物館 The British Museum が

成立してくる。当時のロンドンにおける見世物や各種の興行までも視野に入れたリチャード・オールティックの『ロンドンの見世物』(Altick 1978) の第I～II章は、cabinet から museum へという歴史を詳細にあとづけている。また、大英博物館の詳細な歴史をあとづけたものとしてはエドワード・ミラーの『かの高貴なキャビネット』(Miller 1974) がある。

1753年1月、ハンス・スローン (図1) のコレクション——3,516冊の写本・手稿本と347の絵画・彩色本を含む50,000冊の図書類, 32,000の貨幣・メダル, 5,843の貝類, 2,275の鉱石, その他膨大な数の自然物, 人工物を含むもので、スローン自身の計算では、その価値は80,000ポンドという<sup>(4)</sup>——は、20,000ポンドを二人の娘に支払うことと、コレクションを分割しないことを条件に国に遺贈されたが、<sup>(5)</sup> この申し出に対して英国国会は、同年6月、「ハンス・スローン卿のコレクションあるいは博物館, ならびにハーリー Harley 原稿コレクションとコットン文庫 Cottonian Library とその付属品を受理し、有益に使用するための公衆博物館を入手することを目的とする法案」を採択し、国立博物館を設立する法律 (Act 26 Geo. II C. 22) を制定する。<sup>(6)</sup> これが大英博物館の創設であ

り、1759年1月15日の月曜日から公開されることになる。

英国における公開された公的な博物館としては、これに先立つものとしてアッシュモolean博物館 Ashmolean Museum がある。1683年にエリアス・アッシュモール Elias Ashmole がジョン・トラデスカント父子 the John Tradescant's

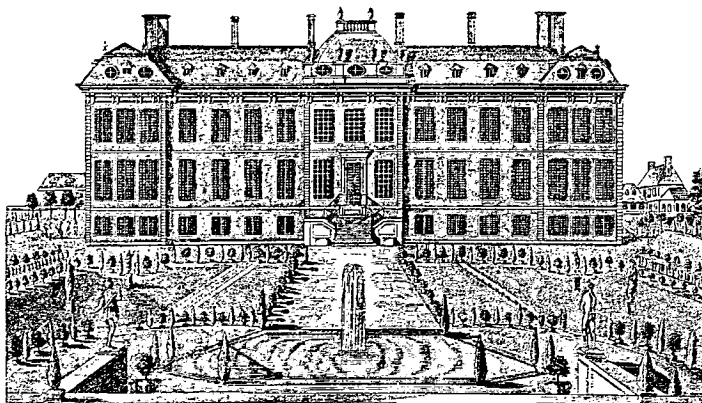


図2 モンタグハウス時代の旧大英博物館 (LIVES of the FOUNDERS of BRITISH MUSEUM より)

のコレクションに自身のコレクションを加えてオックスフォード大学に寄贈して創設されたもので、公開された公的な博物館としては最も古いものの一つである。<sup>(7)</sup>

アシュモレアン博物館も、大英博物館も、その遺贈されたコレクションは、かなり雑多な領域のものを含むが、主体となるものは自然史関係資料（博物標本類）であったといっ  
てよい。17世紀における合理主義哲学、ニュートンの古典力学の完成に象徴される科学の発展の中で、またこれを契機として、自然史関係資料（考古学・人類学的な分野のものも含み、分類は未分化の状態にある）の収集が盛んに行なわれ、私設のコレクション、すなわち *cabinet* や *museum* がイギリスを中心にヨーロッパ各地に膨大な数が形成されたといわれる<sup>(8)</sup> (Murray 1904 chapter III~VIII, Altick 1978 chapter I~II, ベックマン 1981 pp. 437~440)。

これらのコレクションのなかには、公開されていたものが無いわけではないが、市民の利用を明確に前提として公開することが図られるのは大英博物館の創設を待つことになる。二つの革命を経て確立する英国の近代市民社会の生長と重ねあわせることのできる、こうした大英博物館の創設に至る歴史は、近代博物館とその観念の成立、生長が、まさに近代市民社会の生み出したものであることを明らかに示しているといえる。

フランスでは、市民革命の中で近代博物館の考え方が明確に提起されてくる。すなわち、1792年の「公教育の全般的組織に関する報告および法案」<sup>(9)</sup> には、図書館・博物標本室・植物園なども教育の手段であること、収集品を公衆に利用させることが明示される。この考え方の具体的な表われとして、1793年に国民議会はルーブル宮殿を国立の博物館として、王立植物園 *Jardin des plants* を自然史の博物館として、それぞれ公開することを決定している。王室などの旧支配階級のコレ

クションが公開化されるのは、このルーブル宮殿の開放が範となっていることは多言を要しない。

18世紀における英仏での近代博物館の成立については、ブルジョワジーの勃興、市民革命の歴史、デカルト以後の近代合理主義、そして啓蒙思想の展開と軌を一にするものであることは明らかであり、産業革命を経る中での広範な市民、労働者層の教育の要求と必要性、ペスタロッチからルソーにいたる教育思想を背景として、公教育機関として育ててゆくといっ  
てよ  
からう。

ルネッサンスによって育てられた合理主義と実験精神・宗教改革を経て覚醒させられた個人意識——なおそれが宗教的個人としての意識にとどまるとはいえ——、地理上の発見による世界の拡大といった近世の大きな変動が、17世紀には理性による自然や社会の法則の認識への確信を生み出したといえよう。さらに、18世紀の啓蒙思想と自然科学の各分野での急速な発展を生み出してゆく。17世紀後半の英国における二つの革命は、合理主義思想と自然科学の発展の中で解放された自然に続き、個人としての人間を解放してゆく過程でもあったといえるのである。

ニュートンの科学思想とイギリスの経験主義哲学より発する啓蒙思想は、フランスにおいて開花する。『百科全書』に端的に示される啓蒙思想は、まさに時代精神として存在したのであり、近代市民革命を遂行した市民階級  
級の思想としてあったといえる。

神学の軛、神の摂理から解放された「もの」は、科学の急速な進歩の中で、コレクションの対象としての新たな光をあてられたといえる。17世紀後半から18世紀における私設のコレクション——*cabinet* や *museum* の急激な進展は、財宝、ステータスシンボルとしてのコレクションから、なお分類・整理は未分化ながらも、科学の体系的資料として整備されるようになり、また、芸術作品としての

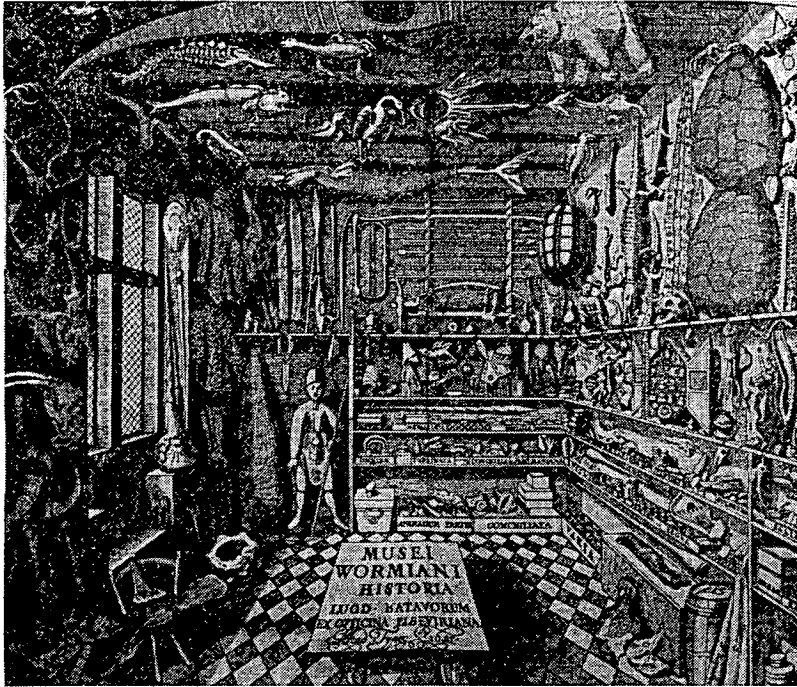


図3 オーレ・ワームのmuseum  
1655 (Alexander 1979 より)



図4 インペラートのmuseum  
(『現代思想』1985-2 より)

位置を明確にしてゆく道を必然的にたどることになる。

### 3.

科学の体系的資料としての「もの」は、今

目的な意味での自然史関係資料を中心に考古学・人類学関係資料が収集されていたことが、cabinet や museum のカタログから知られる。これらの cabinet, museum, あるいは kammer での分類・展示の様子は、当時

図5 大英博物館の展示・サンゴの部屋(19世紀中頃)  
(Miller 1974  
より)

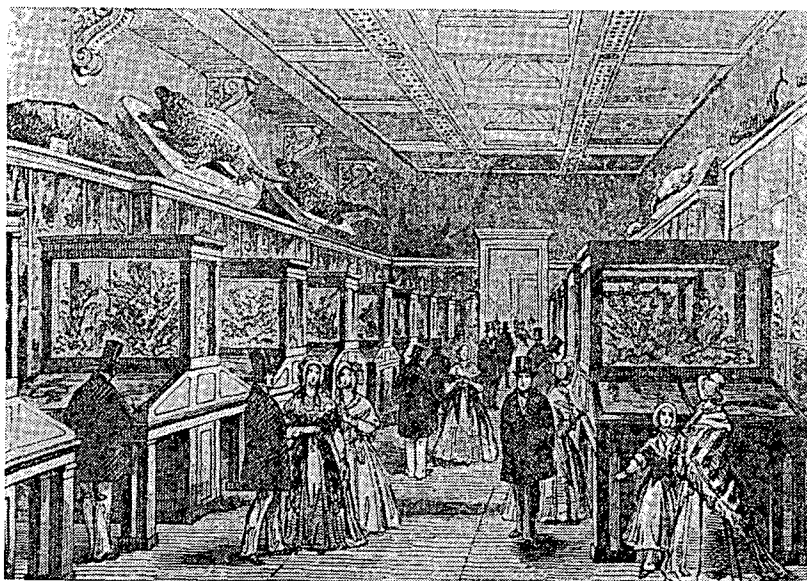
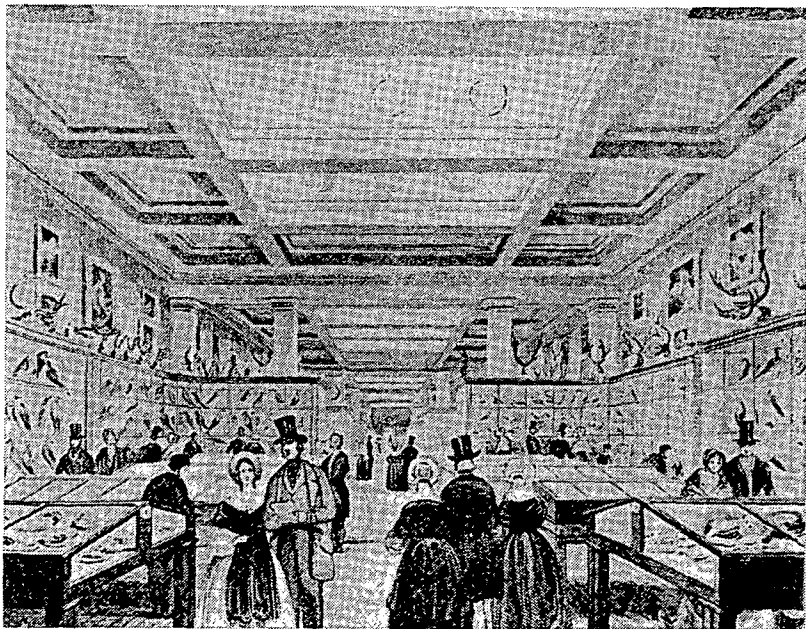


図6 大英博物館の展示・鳥のギャラリー(19世紀中頃)  
(Miller 1974より)



の銅版画などによって、そのいくつかを知ることができる(図3・4)。今日の規準で考えるようには広範な分野の諸資料が充分に分類され、また、展示されていたとはいえないが、<sup>(10)</sup> 多数の図書を含むコレクションが、いわば百科全書的に収集され、体系化されようとしていたといえる。

大英博物館へと繋がる博物標本類を中心と

する cabinet や museum が、図書類を数多く含んでいたことは示唆的である。図書館を併設する大英博物館の在り方は、ハンス・スローンの遺言による資料の分割禁止のみならず、こうした英国の cabinet, museum の伝統を色濃く宿すものとみることができる。

ディドロとダランベールによる『百科全書』(1751~72)のmuséeの項には、museum

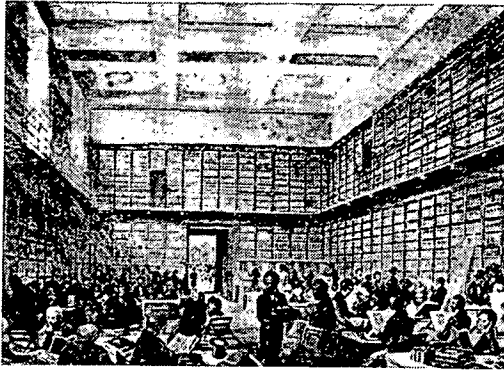


図 7 旧大英博物館の図書室 (Miller 1974より)

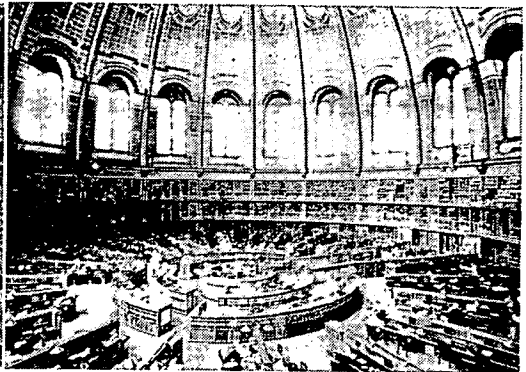


図 8 1930年代の大英博物館図書室 (Miller 1974より)

という語の意味が拡大されて、「もの」を収納する場所に対しても用いられるようになったことに触れ、アッシュモレアン博物館の例をあげる。この項目のほとんどが、古代におけるアレクサンドリアのムーセイオンについて述べることに費やされていることと併せて、博物館の起源を論ずるうえで注目しておくべきことである。

大英博物館が図書館を併設していること(図7・8)は、**cabinet**の伝統という面と、もう一つは、アレクサンドリアのムーセイオンを想起させる。充分な資料的裏付けを持たないが、大英博物館の創設のイメージの中に、アレクサンドリアのムーセイオンが、古代における一つの範として意識されていた可能性は大きい。あるいは、膨大な図書と不可分であった基幹コレクションの性質の故に、その範をアレクサンドリアのムーセイオンに見ようとする意識が次第に強くなっていったと見る方が妥当なのかも知れない。

いずれにしても、アレクサンドリアのムーセイオンを博物館の起源、あるいはその先駆的形態として意識するのは英国にその震源があるように思える。最初の体系的博物館史といわれるディビッド・マーレーの論文が、**museum**という語の元来の意味と『古代における最も重要な博物館』<sup>(11)</sup>はアレクサンドリアのムーセイオンであるとするところから説き起される (Murray 1904 pp.1) ことは

示唆的である。

#### 4.

フランス革命による王制打倒の一周年を期して公開されたルーブル宮は、1737年以来サロンが開かれるなど、テンポラルな展示・鑑賞の場として機能していたことは知られていた。ルイ14世がベルサイユ宮殿の庭園を公開した例や、ルイ15世が1750年以来、リュクサンブール宮殿で絵画を中心とする王室コレクションの展覧会を開き、週に2日は一般にも公開した事例も知られている。さらに、ルーブル宮殿には、王室コレクションの展示のために大きなギャラリーを開設することが計画され、タンジヴィエール D'Angiviller によって1774年には具体案が検討されている。展示のための採光の方法の検討、耐火災建築の検討が行なわれ、また保有する絵画のクリーニングや修復が行なわれる一方、収集の完全を期して、欠落する派の作品の収集を中心とするコレクションの充実が着手されている (Alexander 1979 pp.22~23, Bazin 1967 pp.150~156)。

私的コレクションの中での自然物と人工品の区分は、17世紀以後進展するが、次いで、人工品のなかで、芸術品・美術品として眺められ、取り出されるものが18世紀には明確化してくるといえる。単なる「もの」あるいは財宝的なものから、「芸術」作品としての美

図9 レオポルド・ウィル  
ヘルム大公の私設絵  
画展示室 17世紀  
(Berger 1972 より)



図10 18世紀のウフィツィ  
美術館



術品が分離されてくる動きは、コレクションの分類の動向や、各地の王室コレクションなどの構成原理の変化の中に読みとれるように思う。

芸術作品の摘出とその社会的、道徳的機能への開眼とは、先に述べたように旧制度下で

すでに胎動していた展覧会や美術館開設といった現象と同根である。これは、多木浩二の指摘するように、『すでに美術館を開く原理的な思想はできあがり、(中略)ルーブルを公開に導いた——つまり近代的美術館を開設した——のはフランス革命を起したのと同じ





図11 ヴァレンティ・ゴン  
サーガ廊の絵画展示  
室 17世紀 (Berger  
1972 より)

質の啓蒙思想であった』(多木 1984 pp, 100)のであり、その故に、1793年のルーブルの公開は、近代博物館成立の象徴なのである。

フランスでは、ルーブルの公開、ジャルダン・デ・プランテの公開とならんで、教会から没収した彫刻や絵画をプチ・ゾーギュスタン修道院に集めている。これは後にアレクサンドル・ルノワールによって、フランス記念物美術館とされるものであるが、博物館の展示の歴史を考えるうえで、このルノワールの美術館での「世紀」による展示と、同じく19世紀の初めにおけるデュ・ソムラールによるクリュニイ美術館の「フランソワ1世の部屋」に象徴される展示は歴史展示の二つの実践として注意される必要がある。(12)

## 5.

大英博物館とルーブル宮という近代博物館とその思想の成立を象徴する二つの博物館を検討してきたが、両者には共通する部分もあれば、相互に異なる部分もある。

大英博物館が古代アレクサンドリアのムーセイオンに繋がるような構造をもちながら出発し、科学への関心を集中させるものである



図12 ルーブル美術館の展示 (1778年)

のに対して、ルーブル宮の公開は、旧支配階級の威信、ステータス・シンボルとしてのコレクションを公共のものとするという『啓蒙



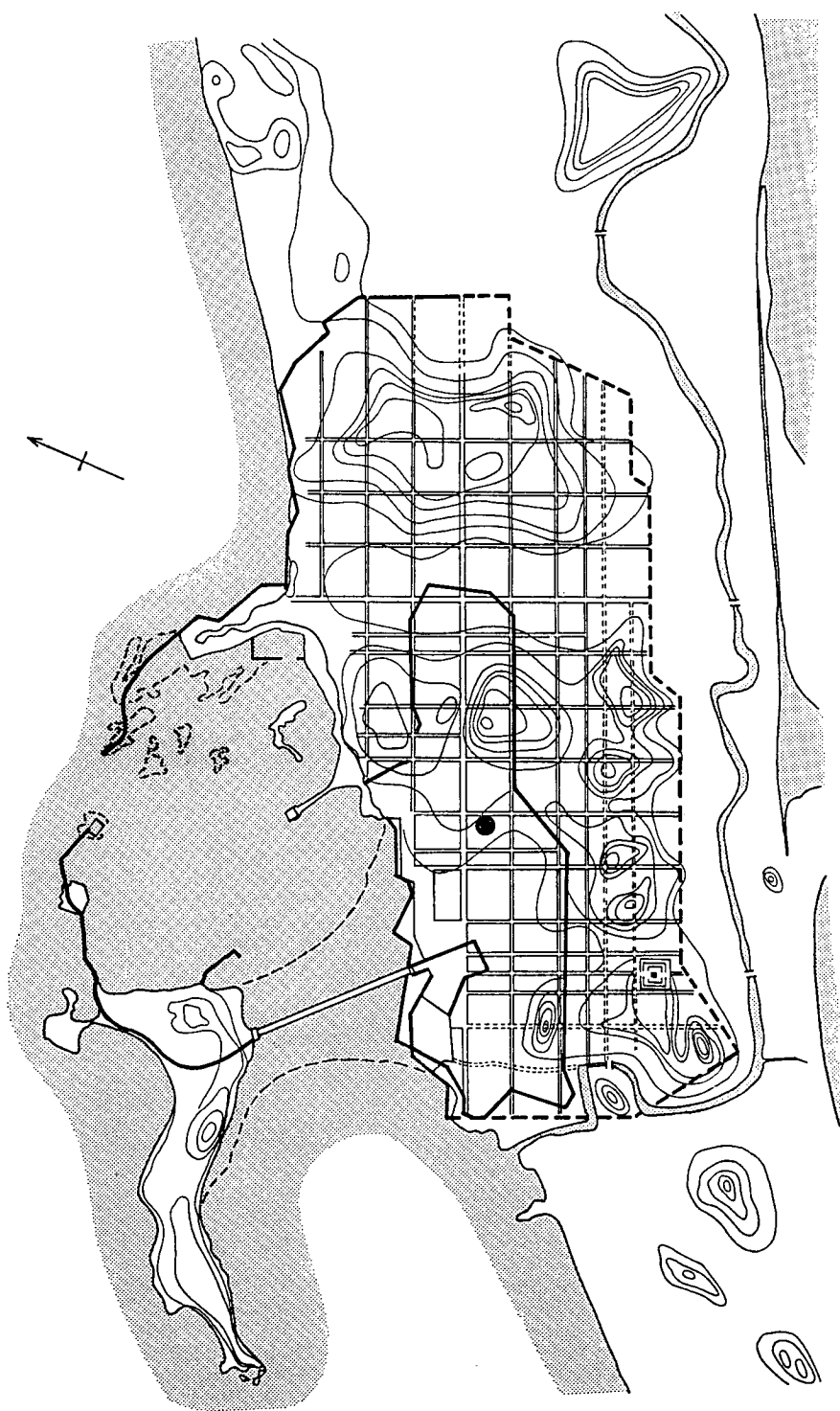


図 13 アレクサンドリアの市街図 ムーセイオンは●印(推定)

的近代を象徴する「政治的」な出来事』（多木 1984 pp. 95）であり、私有されたものではなく、公共へ解放された美術の誕生という意味が強いといえよう。

これらの博物館・美術館の前史は長いが、アレクサンドリアのムーセイオンとギリシャにおけるピナコテカについて検討して、近代博物館との関係をみておこうと思う。

拙稿（1986）にも述べたように、アレクサンドリアのムーセイオン（図13）は、以下のように要約することができる。

前 294 年 以来、その宮廷に庇護を求めていたデメトリオス・ファレロンの進言をいれたプトレマイオス 1 世 ソーテール Ptolemy Soter が、アリストテレスのリュケイオンの学園パリパトスをモデルとして設立した学術研究センターが、アレクサンドリアのムーセイオンである。一応の完成をみるのは後継王プトレマイオス 2 世 フィラデルファス Ptolemy Philadelphus の治世である。プトレマイオス諸王の庇護の下で、ムーセイオンは有名な大図書館とともに存続し、ローマ期には、その事業はそのままローマ皇帝に引き継がれる。アウレリウス帝の時代以後は、規模が縮小されてしまい、セラペイオン内に限られて、活動も停滞してゆくが、その終焉は 391 年の大司教テオフィロスによる破壊によるものである。古典期ギリシャ以来の自由な学芸の伝統が、キリスト教神学の手で終焉を迎える。

アレクサンドリアのムーセイオンの施設としては、王宮の中の学者の住居をはじめ、遊歩道・集会室・食堂があり、必要な研究道具類や施設も意のままに利用できたという。動植物園を附設した共同の大広間や図書館、付属のセラペイオンなどが重要な施設である。

研究に従事する学者・専門家は、税などあらゆる負担を免除され、王からの給費で生活し、研究に専念できたという。

初期のムーセイオンは学士院ともいうべき

性格が強いが、次第に高等教育機関としての活動を拡大していったものといえる。ヘレニズム期からローマ期を通じて、ベルガモンとともに、地中海世界における学芸の中心都市として繁栄した。

ムーセイオンという名称は、古典期ギリシャにおけるミューズの神にささげる神殿の意であったものが転じたもので、神殿としてのムーセイオンは既に前 5 世紀頃のアテネに存在している。次いで、プラトンのアカデメイアや、リュケイオンのパリパトスといった学園にその存在が知られている。アカデメイアやパリパトスのムーセイオンは学園そのものでなく、学園内施設としての神殿の色彩の方が濃厚であったが、ギリシャの他の神殿と同様に、神へのささげ物を持ち、学者の交際するセンター的な機能をもっていたことが推測できる。アレクサンドリアのムーセイオンにあっては、アカデメイアやパリパトスのもっていた研究施設としての部分と教育施設としての部分がともに、ムーセイオンの名の下でまとめられたものと理解できよう。

ヘレニズム世界には、アレクサンドリア以外にも数多くのムーセイオンの存在が知られているが、それらも、単なる神殿とはいえず、アレクサンドリアと同じような性格をもっていたことが知られている。<sup>(13)</sup>

アレクサンドリアのムーセイオンは、確かに学術研究センターであり、高等教育機関であって、今日の博物館とは大きく異なることは認められる。しかしながら、ここを主な舞台として展開された当時の学問研究を見ると、その姿勢は、ある意味でかなり実証的な色彩の濃いものであった可能性を大きくみる必要がある。ムーセイオンの設立の契機を作ったデメトリオスがパリパトスの出身であること、つまり、そのパリパトスを創設したアリストテレスはアレクサンダー大王の庇護の下で、自然物を中心とする研究資料を豊富に集めることができ、そうした収集資料のうえ

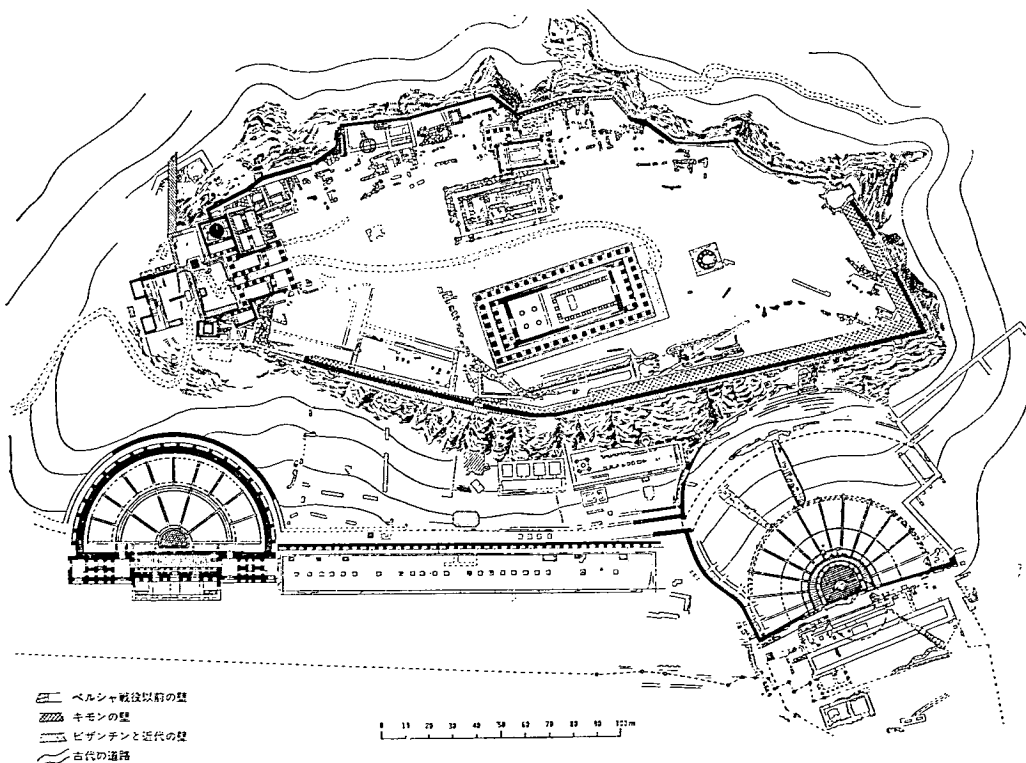
にたって研究を進めていたという学の姿勢とデメトリオスが無縁であったとは考えられないこと、アレクサンドリアでの研究が知られるピタゴラス、アルキメデスらの学問などからみても、研究道具類や資料の積極的な収集が行なわれていたことを推測させるに充分であろう。同じアレクサンドリアの大図書館の収集の哲学、整理の体系を考えると、ムーセイオンにおいても、同様の哲学と整理・管理の体制がとられていたと見ることは、それほど大きな誤りでないと思う。

アリストテレスの先例からみて、存在の知られている動植物園以外にも、相当量の自然物や、今日的な意味での芸術作品などが収集されていたと考えられる。

もし、この仮説が妥当ならば、アレクサンドリアのムーセイオンは、研究活動とそれに沿った資料の収集という点で、今日の博物館につながるような部分を持つといえるし、公

開された展示はなかったにせよ、学者・専門家とその卵たる学生たちにとって利用可能な標本室、実験室的な施設の存在が予想できる。大英博物館を一つの典型とする自然史・博物学資料を基幹とする近代博物館との相似性は否定することもないといえる。

いま一つの美術館の起源とされるピナコテカについては不明のことが多いが、前1世紀のヴィトルヴィウスによって、ギリシャ人の住宅として記録されたものにピナコテカが存在しているし（ヴィトルヴィウス 1969 pp. 597）、このことから廣川洋一が考えるように、プラトンのアカデメイアにおける住宅にも、同様の施設が存在したとみることができるとも知れない（廣川 1980 pp. 40～42, 58～59）。最も著名なものとしては、アテネのアクロポリスの西端部近くに存在したピナコテカがある（図14～16）<sup>(14)</sup>。ムネシクレス Mnesikles の建造になる新プロピュラ



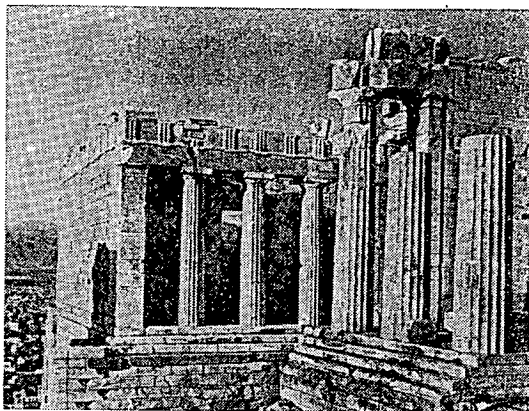


図 15 アクロポリス プロピュライア北翼をなす  
ピナコテーク (森田 1950 より)

イアの北翼として建てられたもので、その創建年代は前 437 年～前 432 年の間といわれる (Travlos 1971 pp. 482)。また、ドクシアデスによるアクロポリスの時代別の測量図でも前 5 世紀中頃にはピナコテークの建物は存在していると読める。これらからみて、小川光暘のいう 2 世紀 (小川 1981 pp. 4～5) は、紀元前と考えても誤りではなかろうか。筆者は一応前 5 世紀にその年代を考えておきたい。

ピナコテークの成立が正確にいつであるか

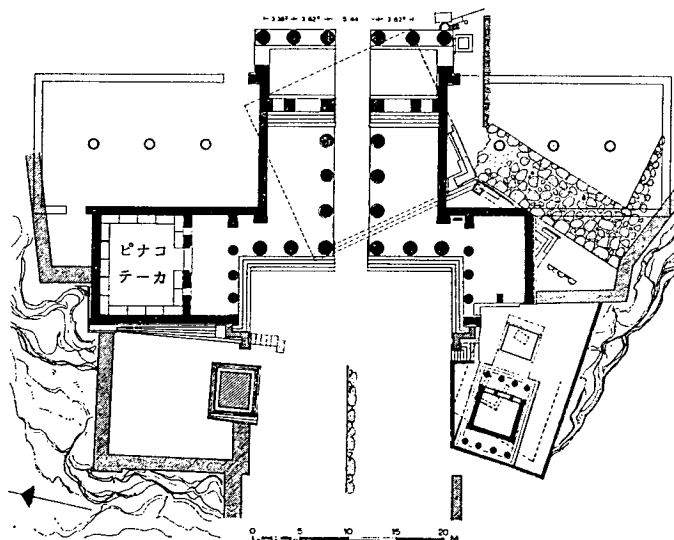


図 16 プロピュライア北翼をなすピナコテーク (Travlos 1971より)

は重要であろうが、それ以上に、これがいかなる用途・機能をもった建物であったのかがより重要である。

トラヴロスによれば、ピナコテークの内部には 17 個の寝台が壁に沿って並べられており、アクロポリスへの巡礼者の休息所としての施設であったとされている (Travlos 1971 pp. 482)。パウサニアス Pausanias によれば、ピナコテークの壁面にはオデッセイやアルキピアデスらを画題とした絵画が存在したという (I, 22, 6～7)。このことからみれば、ピナコテークは絵画の飾られた休息所的な施設としてみてよいようである。

ピナコテークの語源をなす *pinas* が板を意味することからみれば、それらの絵画が板絵であった可能性がある。<sup>(15)</sup> 板絵であれば、収集・展示という概念をもってピナコテークの内容を考えることもできるが、壁画やモザイク画では、収集という概念を持つことは困難であるし、展示という概念も成立するかどうか微妙なこととなる。

収集した絵画の収蔵もしくは展示を、あるいはその両方を目的とする建築物であるとするれば、対象とされた絵画は、板絵と考えるのが妥当であり、ある意味では美術館の原初的な形態と見てよいようなものであらう。<sup>(16)</sup>

絵画の展示という点からみれば、同じ紀元前 5 世紀のアテネのアゴラの北方にあったストア・ポイキレーもあげられる (馬場 1984 pp. 145)。また、古代ギリシャにあっては、彫刻類は神殿など多くの公共的建物を飾っていたことは周知である。ピナコテークと今日の美術館との異同は、その展示の意図、観念を問題に

しなければ、あまり意味はない。この点では筆者はなお充分な論を展開する用意に乏しいために他日を期したいと思うが、神あるいは神話と直結し、そのための表現の一形態であるとすれば、近代における芸術という観念の成立を背景とする美術館とは直接に繋がるものとはいえない。しかし、一方では、ピナコテカが展示という表現形態をとっていたとすると、美術館の形態的な意味での先駆として考えることは妥当としなければならないだろう。

#### 6.

わが国の博物館史の研究は、日本に関するものについては、精緻な論文を数多くあげることができるが、世界的な問題では少ない。古典的な棚橋源太郎の諸著作（棚橋 1947, 1950, 1957）以後、研究の進展をほとんどみせていないといつてよからう。

近代博物館の出発点を論じた多木浩二による労作（多木 1984）があるが、博物館界より出されたものでは、社会や文化の諸状況との関係を明らかにしながら書かれた博物館史は伊藤寿朗（1978）を除けば無いに等しい。他の博物館史関係の論文では、前史的な諸例の紹介や各地の代表的館園の創設年代を追うことに終始してしまっている感が強く、背景としての社会や文化の状況に対する関心は欠落しているか、もしくは著しく稀薄であるといえる。博物館が社会や文化と無縁に存在するのでない以上、また、博物館がどのような理念で創られ、活動し、何を生み出してきたのかを考えなければならないのが博物館史である以上、今日の研究の状況は大変に問題があるといわねばならない。

拙稿がこのような課題に対して、充分な内容を持ち得なかったことへの自戒の意も含めて、一層の研究の必要を痛感する。

#### 【註】

1. 日本では、棚橋源太郎以来、アレクサンドリアのムーセイオンを博物館の起源とする考え方が定説化しているといつてよからう。棚橋は『世界の博物館』、『博物館学綱要』、『博物館・美術館史』などを通じて、ディビッド・マーレーの記述に拠りながらアレクサンドリアのムーセイオンを博物館の起源として紹介する。鶴田総一郎（1956）、川崎繁（1967）、富士川金二（1971）、加藤有次（1977）らも、この棚橋の考え方を基本的に踏襲しているとみてよい。

一方、アレクサンドリアのムーセイオンよりはむしろアテネのピナコテカを美術館の原初的な形として評価しようとするのが小川光暘（1981）、小竹菁子（1985）らである。

これらの諸説については拙稿「博物館の起源について」（『駿台史学』第67号 1986）で検討している。

2. 前記の拙稿においても述べたように、欧米の博物館史の記述では、ことさらに古代の諸例のどれかを博物館の起源として強調するものは少ない。むしろ博物館の前史として、古代～近代初頭の諸例に触れ、私的なコレクションが公的な博物館へと転換してゆくところに焦点をあてているとみてよい。日本では伊藤寿朗が博物館を『近代の歴史的所産』として論じている（伊藤 1978）。
3. マーレーのあげる収集品やその収納場所・施設に対して用いられたとされる語は多い。*Gazophylacium*, *Cimeliarchium*, *Repository*, *cimelium*, *κειμηλιον*, *cimeliotheca*, *rarothea* などの語がみられ、次第にラテン語の *musaeum* ないし *museum* が定着してゆくという。収集品については *museum* 同様に *rarities*, *curiosities* が用いられる例が多く見られる。収納施設に対しては、*museum* の他に *study*, *cabinet*, *closet* や *galerie*, *chambre*, *kammer* などが用いられているという（Murray 1904 pp. 34～38）。
4. ハンス・スローンのコレクションの総数と内容については他にも種々の数字が知られている。1725年のスローン自身によるものでは5,497の鉱石・化石類、804のさんご、8,226の

- 植物類, 200冊の植物乾燥標本, 3,824の昆虫, 3,753の貝類, 1,939のウニ・甲殻類・魚類など 568の鳥類と 185の卵, 1,194の四足獣とその部分, 345の蛇, 507の *humana*, 1,169の自然・人工の雑多な物, 302の古代の習慣に関する物, 81の印章類, 319の絵画, 54の数学に用いる道具, 441の奇石類による工芸品, 20,228の貨幣とメダル, 136冊の彩色画本, 580の印刷本, 2,666の写本・手稿本など総数 53,018点といった数字が知られる。この他に, 1733年には総数 69,352点という数もあげられている。(Murray 1904 pp. 137~8)
5. スローンの死後 6 カ月以内に 2 万ポンドが支払われるのでなければ, 同じ内容のオファーを英国学士院 The Royal Society に, 次いで他のイングランド, スコットランドの研究機関に, さらに同様の外国の団体に行うこととスローンの条件ではいずれもが受け入れなかった場合にはオークションによる売立てをすることが遺言されている (Miller 1974 pp. 41)。
  6. 200年間はいかなる本質的な変更も加えないことを明記している。1963年には大きな改正が加えられた the British Museum Act of 1963 (Public General Acts, 1963. C.24. 10 July 1963) が 1753 年の法律に取って替っている (Miller 1974 pp. 357)。
  7. 最初の大学付属博物館はバーゼルの大学博物館で 1671年の創設とされる (Alexander 1979 pp. 8) が, ピサ, パドヴァ, ライデンの大学に植物園が設けられたのは16世紀である (伊藤 1978 pp.21)。
  8. Murray のあげるものだけで数十にのぼる。所有者や内容の不明確なものを含むとイギリスだけで数百に達するという (Crook 1972. 伊藤 1978)。
  9. コンドルセ Condorcet によってまとめられたもので, 国民議会に提出された (コンドルセ, 松島訳 1962)。
  10. 多木浩二 (1984) の第 2 章に端的にこれらの cabinet の分類・整理の状況が示されている。その中で, cabinet, museum と同義のものであるドイツの kammer への言及がある。  
C・F・ナイケル Neickelius の『博物館学』(1727) にはコレクションの大分類としての kammer が示されている。“Eine Schatz-Raritäten-Naturalien-Kunst-Vernunft-kammer, Zimmer oder Gemach” というもので (Murray 1904 pp. 38による), 多木浩二によるルイジ・サレルノ論文からの引用と用語に若干のちがいがあがあるが同じものである。
  11. “the most important museum of antiquity was the great institution at Alexandria” となっており, 棚橋源太郎 (1950 など) のように『世界最初の博物館』という表現ではない。棚橋のアレクサンドリアのムーセイオンに関する記述は, ほとんど Murray (1904) の記述に拠っているところからみると, この差異は注意する必要がある。
  12. 19世紀における博物館での分類の深化と展示の理念の変遷については, 別稿を用意したい。ルノワールとデュ・ソムラールのこの二つの展示については, ステファン・パンの論文が興味深い分析を提示している (パン 1985)。
  13. 以上のアレクサンドリアのムーセイオンに関する要約は, Müller-Graupa 1893 の論文 ‘Μουσείον’ H.I. マルー (横尾壮英・飯尾都人・岩村清太訳) 1985の『古代教育文化史』に拠るもので, 他に, 廣川洋一 1980, 坂口昂 1923, 棚橋源太郎 1950, Murray 1904, Alexander 1979 などを参考とした。
  14. アテネのアクロポリスにおけるピナコテカは, プロピュライアの北翼をなし, 『イン・アンティス型の前室』を持つ。『前室の奥の壁には絵画室に入る戸口と, その両脇に一つずつの窓が非対称形に設けられている。』(森田 1950 pp. 276)。
  15. 森田慶一によれば, ピナコテカの『室内を飾った絵画はフレスコであったかタブローであったか, 未だ定説がない。』(森田 1950 pp. 276) とされている。筆者もこの点の調査はまだ充分ではない。
  16. 小竹菁子は『今日の美術館とほぼ同様の機能をもった博物館施設』(小竹 1985 pp. 6~7) とアクロポリスのピナコテカを評価するが, ピナコテカの実態が十分に明らかでないことを考えると, やや過大な評価である。



【引用・参考文献】

- Alexander, Edward P. 1979 "Museums in Motion" Nashville: American Association for State and Local History.
- Altick, Richard D. 1978 "The Shows of London" Cambridge, Mass., and London: Harvard University Press.
- 馬場恵二 1984 『ギリシャ・ローマの栄光』(ビジュアル版世界の歴史 3) 東京: 講談社
- バン, ステファン 松浦寿夫・天野知香訳 1985 「博物館の詩学」『現代思想』1985-2 東京: 青土社  
(Stephen Bann 1984 "Poetics of the museum: Lenoir and Du Sommerard in *The Clothing of Clío*" London: Cambridge University Press.)
- Bazin, Germain 1967 "The Museum Age" New York: Universe Books.
- ベックマン, ヨハン 水野みな子訳 1981 「自然物の収集」特許庁内技術史研究会訳『西洋事物起源』II 東京: ダイヤモンド社 pp.432~446  
(Johann Beckmann 1780~1805 "Beiträge zur Geschichte der Erfindungen")
- ヴェネーボロ, レオナルド 佐野敬彦・林寛治訳 1983 『図説都市の世界史 1 古代』東京: 相模書房  
(Leonardo Benevolo 1975 "Storia Della Città")
- コンドルセ, 松島鈞訳 1962 『公教育の原理』(世界教育学選集) 東京: 明治図書
- Crook, James Mordaunt 1972 "The British Museum" London: Penguin Press.
- ドクシアデス C. A. 長島孝一・大野秀敏訳 1982 『古代ギリシャのサイトプランニング』東京: 鹿島出版会  
(C. A. Doxiadis "Architectural Space in Ancient Greece")
- 富士川金二 1971 『改訂増補 博物館学』東京: 成文堂
- 廣川洋一 1980 『プラトンの学園 アカデメイア』東京: 岩波書店
- 伊藤寿朗 1978 「博物館の概念」伊藤寿朗・森田恒之編『博物館概論』東京: 学苑社
- 加藤有次 1977 『博物館学序論』東京: 雄山閣
- 川崎 繁 1967 「博物館」『世界大百科事典』18 東京: 平凡社
- 小竹菁子 1985 「世界の博物館」網干善教・小川光暘・平祐史編『博物館学概説』京都: 仏

教大学

- マルー, H. I. 横尾壮英・飯尾都人・岩村清太訳 1985 『古代教育文化史』東京: 岩波書店  
(Henri-Irénée Marrou 1948 "Histoire de L'Éducation dans L'Antiquité" Paris: Seuil.)
- Miller, Edward 1974 "That Noble Cabinet" Athens, Ohio: Ohio University Press.
- 森田慶一 1950 「ギリシャ建築」及「図版解説」『世界美術全集 5 ギリシャ I』東京: 平凡社
- Müller-Graupa 1893 'Μουσείον' Georg Wis-sow "Paulys Realencyclopädie Der Classischen Altertumswissenschaft" Stuttgart: Alfred Druckenmüller ver-lag.
- Murray David 1904 "Museums: Their His-tory and their Use" vol. 1, Glasgow: James MacLehose and Sons.
- Neickelius, C. F. 1727 "Museographia".
- 小川光暘 1981 「ヨーロッパの博物館史」『博物館学講座』2 東京: 雄山閣
- Pausanias 1959 "Description of Greece, with an English Translation by W. H. S. Jones, Litt. D." London: William Heinemann.
- 坂口 昂 1923 『世界に於ける希臘文明の潮流』東京: 岩波書店
- 高山 宏 1985 「死物の科学」『現代思想』1985-2 東京: 青土社
- 多木浩二 1984 「「もの」の詩学」(岩波現代選書) 東京: 岩波書店
- 棚橋源太郎 1947 『世界の博物館』東京: 講談社  
同 1950 『博物館学綱要』東京: 理想社  
同 1957 『博物館史・美術館史』東京: 長谷川書房
- Travlos John 1971 "Pictorial Dictionary of Ancient Athens" London: Thames and Hudson.
- 鶴田総一郎 1956 「博物館学総論」日本博物館協会編『博物館学入門』東京: 理想社
- ヴェトリヴィウス 森田慶一訳註 1969 『ウィトルウィウス建築書』東京: 東海大学出版会  
(Vitruvius "De Architectura")
- 矢島國雄 1986 「博物館の起源について」『駿台史学』第67号 東京: 駿台史学会